

---

# 少女

野口つつじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女

### 【Nコード】

N9727F

### 【作者名】

野口つつじ

### 【あらすじ】

小学校を卒業して半年。中学校に馴染めずにいる少女の成長の物語。

## 第一章 一（前書き）

初投稿でございます。

温かい目で見守ってくださいるととても嬉しいです。

まだほんの少ししか書き上がっていませんが、問題点などあれば指摘していただけたら私自身成長するかと思っております。

感想をいただけるのならそれはもうとっても嬉しいです（笑）

## 第一章 一

中学校への道の途中、半年前まで自分が通っていた小学校の校門を横切る。にぶい銀色の門。その向こうにそびえる灰色の校舎は、今思えばまるで桃源郷だった。朝っぱらから、ジャングルジムの頂上で騒ぐ男の子がいる。三年生くらいだろうか。元気でよろしい。羨ましいかぎり。

推定九歳の男子がはしゃぐその場所は、中学校の半分程度しかない、ちつぽけな校庭の東端である。北端にあるのは、点々と錆びた朝礼台。さらに北に走れば古い校舎。そして教室。

時は過ぎてしまった。私はもう、ここには戻れない。

今日は、夏休み明け初の金曜日だ。横浜市立某中学校内は、全体的にざわついている。馬鹿真つ盛りの中学生に一週間で落ち着けというほうが無理な話だが、教師たちは声を張り上げる。馬鹿真つ盛りの中学生たちは先生たちの注意を無視するが、そんな状態になることはどの教師も予想していたことだったから、本気の雷はどの学級にも落ちていない。

すみかわなまこ  
住川尚子は一年三組の教室に入ると、誰と挨拶を交わすこともなく自分の机に荷物を置いた。

教室内にいるのは大半が女子だった。いくつかのグループに分かれてお喋りをしている。入学して半年、たったそれだけの期間で仲良しになれることが尚子には不思議だった。そのくせ、自分に友達が少ない理由は、自分自身が人付き合いに消極的だからだということとは理解している。

尚子は教室の二つのドアを、ちらり、ちらりと見た。黒板側のドアには、鈴江有里香すずえゆりかをはじめ気の強い女子グループが集まっている。

有里香は百六十五センチを超える長身をドアにあずけていた。彼女の周りでは四人の女の子たちが笑っていて、そのうちの二人が出入り口を塞いでいる。尚子は反対側のドアから廊下に出ることにした。行き先はお隣の一年二組である。彼女の数少ない友人の一人が、机に向かっているはずだった。

案の定、友人は席についてシャーペンを握っていた。勉強が趣味だと明言するその女の子は、常に黒縁眼鏡をかけている。栗毛色のポニーテールがよく似合う美少女だ。

「おはよう」

尚子が近寄って友人に声をかけると、黒縁の奥の丸っこい目が彼女を見た。

「おはよう」

舟野美玲ふなのみれいは浅黒い色の頬を緩ませた。

彼女は日本人の父とフィリピン人の母をもつ、ハーフである。

小学三年生のころ、住川尚子すみがわなおこがいたクラスに、舟野美玲ふなのみれいが転入してきた。

美玲が先生と一緒に教室に入ってきたとき、児童たちは、お互いに顔を見合わせたり、えっ、と声をあげたりして、あからさまに驚いた。尚子も例外ではなかった。転入生は、幼いながら大人っぽい美しい顔立ちをしていて、誰も彼女を不細工と罵ることはできないだろうと感じた。しかし、そのきれいな顔の前に注目したのは肌の色である。お決まりの質問攻めタイムで美玲は、自分がフィリピン人とのハーフであることを話した。尚子は、美玲の緊張した表情を、うつすらと覚えている。

その後、自分がどうして美玲と親しくなったのか、きっかけは何だったのかも思い出せない。しかしあれからおよそ四年、今でも仲が良いということは間違いない。

「ねえ、今日って部活あるっけ」

「あるよ」

尚子が答えると、美玲はわざとらしく溜息をついた。

「つまんなあーい」彼女がのびをする。「デッサンしかないんだもん」

「だよねえ」尚子も賛同した。

「とかいって、絵上手いくせに」

美玲が尚子を睨みつける。尚子は彼女の顔を見て、改めていいなあと思った。

「私なんか全然だよ。ほんとほんと。ミレだってさあ、うまいしさあ。雨木さんたちだってすごいと思うし」

「んー。そうかあ？」美玲は言葉を濁す。

一年生の美術部員は尚子と美玲、そのほかに雨木恵実あめぎめぐみを含める五人の女の子たち。男子はゼロ。尚子たち二人と恵実たちは、別々の

テーブルに座って作業をする。尚子が最近うすうすと感じ始めたことは、美玲はどうも恵実たちが気に入らないらしいということだった。彼女がはつきりと恵実たちの悪口を言うことはないし、尚子が話をもちあげることもないから、当たり前なのかどうかはわからないのだけれど。

昼休み。尚子は自分の席で読書をしていた。気に入っている作家の青春モノで、つい最近、自分の小遣いで買ったばかりの文庫本だった。

「尚子チャーン」

名前を呼ばれて振り向いた。尚子のところへ向かってきていたのは一年五組の潮永瑞希しおながみずきだった。瑞希とは保育園も小学校も違い、入学したてのころ廊下で声をかけられて以来、会ったときに手を振ったり、たまに話したりしている。

しかし、親友ではない。瑞希には友達がたくさんいる。

「何読んでんの？」瑞希が尚子の手許を覗き込んだ。

「丸山キミコのリメンバーって……高校生の青春の話なんだけど……」

「ほおーん」

瑞希は口の形を丸にしてリアクションをとった。彼女は二秒間本を見つめると、まるめていた腰をおこして去っていった。そのあと、尚子は引き続き本を読みながら、明るい調子で女友達と話す瑞希の声を聞いた。

ミスをした。丸山キミコ、と粗筋は、カットするべきだった。瑞希は私に話しかけて、すぐ友達のところへいく予定だったに違いはない。彼女にとっては四秒のタイムロスだった。尚子は紙面にずらりと並ぶ活字から一旦目を離し、瑞希を見た。彼女は女子数人の輪の中心で喋っている。そして、彼女を囲んでいた女子たちが手をたたいてあははと笑い声をあげた。潮永さんを嫌う子っているのかなあ、

心算で九九の表を作った。

その日の午後二時過ぎ、尚子なわこと美玲みれいは一緒に美術室へ向かった。平常授業の日ならば部活動を始めるのは三時半ごろだが、夏休みが明けて間もないので授業のスケジュールは変則だ。美術部は今日が休み明け初めての活動日である。今日はいつもより長く、三時間も部室にいななければならない。美玲がうんざりだという主旨のことをしきりに漏らすのを聞きながら尚子は相槌を打っていたが、実はそう憂鬱ではなかった。むしろ久し振りにデッサンをするのが楽しみだった。けれども、こうも思う。雨木恵実あめきめぐみたち五人のグループや、後輩に関心のない先輩たちと同じ空間。ちよつと、気まずい空間でやるより、家でやりたい。黙々とひとりで描いたほうがよほど集中できる。尚子は入部五ヶ月目にして既に、退部を目標として活動していた。

「こんにちはー」

美術室の戸を開け、尚子は美玲と同時に言った。戸に一番近いテールテールにいた恵実と、同じ五人グループの畑谷はたやゆかりがこちらを向いたが、その二人からも先輩たちからも挨拶はなかった。部室に入るときは挨拶をする、そしてその返事はしない。美術部の暗黙の了解ともいえる、いつものことだった。どうやら仲間のうちの三人がまだ来ていないらしい恵実とゆかりがお喋りをはじめた。女の子たちのお喋りは部屋の至るところで、部活動中であることなどお構いなしにされていた。そのために尚子の耳には、彼女らの話し声がざわざわとした騒音となって届いている。

尚子は先に室内に入った美玲の後につき、定位置に座った。足元に鞆たもとを置いてから、筆箱とスケッチブックを取り出す。左隣を見ると、美玲は道具も出さずいかにも気だるそうに頬杖をついて、独り言のように「だるう」と呟いた。そのとき、ガララという音がした。「こんにちはー」

入ってきたのは二年生だった。二年生の部員は四人で、そのうち三人はいつも同じテーブルに座っているのだが、この先輩はいつもひとりだった。尚子は彼女の名字がサクラであることを夏休み前に知ったばかりで、そのほかに彼女について知っている情報といえば、デッサンがうまいということだけだった。

サクラ先輩はゆっくりと歩き、定位置についた。先輩の定位置は尚子の向かいである。学年は違えど、はぐれ者どうしで自然と同じテーブルになった。尚子と美玲が恵実たちと一緒にテーブルにつくには場所が無いし、何より気まずい。サクラ先輩は尚子たちが入部したとき、ひとりでひとつのテーブルを占領していた。ほかに空いている場所が無かったために尚子と美玲のふたりはサクラ先輩の領地に踏み込んだのだが、先輩は全く気にする様子を見せなかった。以来、三人で同じテーブルに座って作業をしているが、これといった話をしたことはない。尚子から話しかけることも、先輩に話しかけられることもなかった。入部したてのころは席につくとき挨拶のひとつくらいしたほうがいいのだろうかと思ったことはあったが、もじもじして声をかけられないでいるうちに、干渉のない空間が出来上がっていった。

でも、尚子は密かにサクラ先輩を尊敬していた。デッサンは開かれて置きっぱなしにされていたスケッチブックのページを覗いた限りでは三年生の先輩より上手だし、肩までの黒髪はきれいで、鼻は少し低いけれど顔立ちが整っている。体はとても痩せていて、ろくに食べていないのではないかと心配になるほど頼りないが、彼女がもつ雰囲気尚子は好んでいた。本当に唯一、尊敬できる先輩である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9727f/>

---

少女

2011年1月1日14時00分発行